

(社)地盤工学会関東支部



JGS Kanto

Newsletter

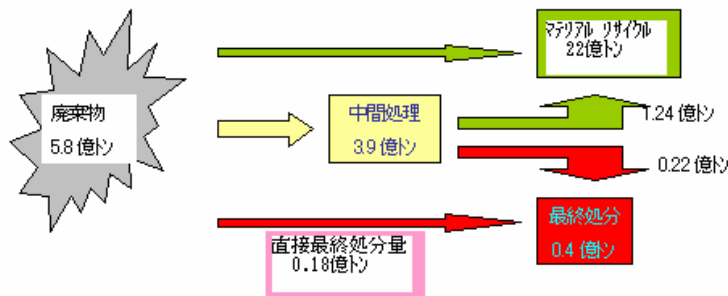
Kanto Branch of Japanese Geotechnical Society

物質フローと地盤工学

関東支部副支部長 齋藤 邦夫

わが国は自然界から大量の資源を採取し、精製・加工してさまざまな物資を生産・消費することで便利で豊かな生活を支えています。

例えば、平成 15 年度のわが国の物質フロー¹⁾では 19.8 億トンもの総物質投入量があり、およそその半分の 9.3 億トンが建物やインフラとなって社会に蓄積されています。また、製品の形で 1.4 億トンが輸出に振り向けられ、4.2 億 t がエネルギーとして消費されています。そして総物質投入量の約 30% に相当する 5.8 億トンが廃棄物として排出されています。



さて、この 5.8 億トンの廃棄物ですが、そのうち 3.9 億トンを中間処理することにより、1.2 億トンが再資源化され、約 1 億トンの再使用量を合わせた 2.2 億トンがマテリアル リサイクルとして循環利用されています。すなわち、再生利用・再使用を合計しても、その量は総物質投入量の約 10% に留まり、最終的に 4 千万トンもの量が最終処分場に埋め立てられているのが現状です。最終処分場の容量が十分であれば問題は無いのですが、廃棄物処理法の改正（平成 9 年施行）により、産業廃棄物処理施設に関する新規の許可件数は激減し、最終処分場の残余年数に大きく影響しています。

このため、現実には既存処分場のかさ上げや斜面の急勾配化などで埋立て容量を確保することもしばしば経験するところです。当然、その安定性は地盤工学の手法に基づいて検討するのですが、その際注意しなければならないのは、安定解析に入力する物性値です。廃棄物を地盤工学的に分類すると、c 材に区分されるもの、材として扱われるものあるいは c- の両方の性質を備えたものなどがあり、それらは極めて変動が大きいのが特徴です。単位体積重量もそのひとつで、種類によって軽いものから重いものまで実に様々な値をとります。さらに材料によっては経年的に特性が変化したりする場合もあり、判断を一層難しいものになります。そもそも物性を評価する決定的な方法が、廃棄物には無いと言ってよいでしょう。したがって安全を期すると、入力パラメータの設定法あるいはこれに物性の変動を如何に取り込むかを考える必要が有るように思われます。

処分場では、透水係数に厳しい条件を持った遮水層を設け、汚水が場外に流出しないよう設計・施工しなければなりません。廃棄物を埋め立てる過程で遮水層はせん断変形を受け、それが透水係数に不都合を来たしてはならないことも考慮しなければならぬ条件です。このように考えると遮水層は、ひずみ硬化型の応力～ひずみ特性を有し、しかも透水性が基準値を満し且つ施工性に優れた多機能性の材料が適当となります。高機能で安価な遮水材の開発は、これからますます重要な検討課題になること考えられます。

廃棄物を空中に漂わせて置くわけにはいかないし、海に流してしまうわけにも行きません。廃棄物処

分場に限界があるとすれば、今日の状況を少しでも緩和するには、資源として有効活用を徹底する以外に方法はありません。その際、効果的に工学的特性の改善がなされたと仮定したとき、それらを大量に受入れて活用出来るのは、地盤・土木の分野以外にないことも自明です。地盤工学が環境問題解決の鍵を握っているのです。したがって、様々な方法で処理・生成された物質の特性を出来るだけ簡単に把握でき、適用条件との整合を図ることがますます求められるものと思われまます。また、そうすることが自然資源の保全に直接寄与することにもなります。

産業廃棄物処理施設設置に関する法律が強化され、処分場の建設が困難な中で廃棄物のリサイクルが強く叫ばれるのはこのためです。

廃棄物処分場からの浸出水の漏洩事件が漏れ聞こえてまいります。今のところ実害は無いということで一安心ですが、この点にも目を向ける必要があると思われまます。適切な対策を講じて被害を最小限に食い止めることが何よりです。近年は漏水検知システムや、自己修復シートなどを組み込んだ安全対策が施されておりますが、一旦漏洩が生じたとき、適切な対策を講じて被害を最小限食い止めるためには漏洩の原因、箇所、その時期、汚染物質と濃度、経路と範囲、地下水の流況、地盤の構成等々の情報が不可欠です。これらの分析を通じ、汚染物質の除去、汚染経路の閉塞など具体的対策が現実化されると考えられます。地盤工学は、このようなアクシデント、危機管理の中心に位置する技術ではないでしょうか。

以上、廃棄物の処理・処分と地盤工学の関わりについて述べてまいりましたが、翻って、資源採取と地盤工学の間にも少なからず関係があるように思われまます。

例えば、今日の石炭、鉄鉱石など各種鉱物資源の採取には、ドラッグラインなど掘削機を用いて効率の高い、大規模な露天掘りをしばしば目にするところす。当然、掘削に伴って斜面が形成されますが、その安定はまさに地盤工学が専門とするところす。

むしろそれ以前に、鉱床を覆う覆土の撤去・処分も同様に地盤工学の範疇に属する事柄にほかなりません。

つまり、地盤工学は物質フローのスタートとゴールを担う欠くことのできない技術であると言えます。

日頃、学生と一緒に取り組んでいるテーマを通じ、物質フロー～環境～地盤工学の3者に関連付けてみました。環境問題と地盤工学は切っても切れない関係があり、この分野に多くの方々の関心が寄せられ、安全・安心の技術がますます進展することを期待致しまます。

参考文献 1)平成18年版循環型社会白書 環境省編

第37回アフター5 談話会「世界の地形と民俗学」の実施について

会員サービスグループ 幹事
佐藤 博(東京電力株)

平成18年11月17日18時より、JGS会館会議室にて標記談話会が開催されました。講演者は学会副会長の東京電機大学安田進先生で、先生がこれまで訪問された世界の国々の様々な地形をご自身で撮影された100枚以上の航空写真などから、現地で感じとられた文化や民族模様を交えて解説されました。先生が若い頃滞在された南米チリを皮切りにして北上し、中米、北米、アラスカと続き、アリューシャン列島を渡ってアジアに入り、中国、東南アジア、オセアニア、中央アジアに戻って最後はヨーロッパのスイスに至る、22カ国の世界一週旅行を、各国の民謡などをBGMにして、僅か2時間で興味深く解説されました。



奇怪な形状をした南米の山々、ペルーのナスカやマチュピチュの遺跡、旅順港を見下ろす203高地の日露戦争跡、中国に渡った日本人を讃える西安の石碑、オーストラリアのブルーマウンテン、中央アジアの奥深い山並み、イタリアのベスピオス火山、マッターホルンの勇壮な山容などなど・・・を、各地にまつわる歴史話、先生と親交の深いフィン先生やモラ先生のご家族の様子などを交え、時間の経つのも忘れてのご講演でした。

最後に貴重なお話を提供していただきました安田先生に対し深く御礼申し上げます。

産業技術総合研究所（地盤工学関連）見学会

茨城県グループ リーダー幹事
松島 巨志（筑波大学）

関東支部茨城県グループでは、研究学園都市であるつくば市を中心として県内に数多くの研究・教育機関が立地するという地域色を活かし、定期的に「研究所めぐり」を企画いたしております。第2回目となる今回は、訪問先として、産業技術総合研究所を設定し、2006年12月8日に行われました。30名の参加者が、活断層研究センター、地質調査総合センター地質情報研究部門、地質調査総合センター地圏資源環境研究部門、メタンハイドレート研究ラボ等の地盤工学関連施設を見学しました。普段は余り見られない、しかし地盤工学に密接に関わる見学内容に、参加者も興味深かったようです。見学内容の詳細は <http://geotech.kz.tsukuba.ac.jp/tmatsu/kengaku/houkoku.html> をご覧下さい。

このような交流を通じて、分野横断的な視野とネットワークを育て、そのような足場で研究や実務を進めていくことが、これからの地盤工学には求められていると、個人的には感じています。

見学コースとしてお願いした各施設の方々には、いろいろとご無理をお願いしたにもかかわらず、快く見学を受け入れていただきました。ありがとうございました。

今後も、定期的に見学会を実施する予定です。皆様のご参加をお待ちしております。



写真 見学会の状況

新潟県旧山古志村における現地調査体験記

星 千恵（中央大学理工学部土木工学科）

2006年12月12日の夜に出発し13、14日の2日間、研究のための現地調査に同行しました。12日は長岡駅前にて宿泊し、13日朝に東竹沢に向け出発しました。長岡駅付近では地震があったなど全く感じられませんでした。東竹沢にだんだんと近づくにつれて、傾いたガードレール、破損して放棄された車・・・といまだ生々しい震災の傷跡が見られるようになってきました。以前にも現地に訪れた経験のある原先生や先輩、同級生は口を揃えて「綺麗になったもんだねえ。」とっていました。しかし、川の中央部に取り残され1階部分が完全に水没した家、崩れた牛舎、今も復旧作業中の多くの重機等は、今回初めて訪れた私にとってはとても「綺麗になった」とは感じる事ができず、衝撃的な光景でした。

長岡駅前から車で約1時間後、調査現場に到着。現場は急傾斜の山で草木が倒れ、「一体どこから登るんだろう？下のほうで作業するのかな？」とってしまうほどでした。しかし、現実はその甘くなく「さっ、あそこらへんまで登ろうか。」と先生が指さす先は頂上付近でした。以前に千葉の浅間山に登ったことはありましたが、今回の山は見るからに登りづらそうです。早速作業道具を持って、必死に草



写真 サンプルングと調査の状況

木をかき分けながら先生たちの後を追って登りました。頂上に着いてからは作業に集中して取り組んだためか、あっという間に時間が経ちました。夕方頃、雨が降り出し

作業を終了しました。降りる時は雨のせいで足元が滑りやすくなっており、登るときより増して苦労しました。下山すると、私の黒いはずのズボンがまっ茶々で泥まみれになっていました。

帰りに、以前から調査の折にお世話になっている旧山古志村にお住まいの小川様のお宅にご挨拶に伺いました。突然の訪問になってしまった上に、泥だらけの私たちに小川様ご夫妻はご親切にお洋服を貸して下さり、普段口にする事のない山古志で採れた食材を使った美味しい食事と地震体験談を聞かせていただきました。「地震時に畑の大根が抜けて飛んでいった。」「地面から吹っ飛ばされた。」等のお話は、実際に大地震を経験した方ならではのもので、改めて地震の怖さを思い知りました。

翌日 13 日は寺野地区にて現場調査を行いました。以前の調査では寺野地区に続く道は封鎖されており、行くことができなかつたそうです。こちらも痛々しい震災の傷跡が残っており、道も東竹沢よりまだ荒れている状況でした。昨日の経験からか寺野での作業はスムーズに進みました。

今回の体験で実際に現地に訪れてみないと感じ取れない、東竹沢の現状、地震の怖さやその後の生活の大変さを実感しました。とても貴重な体験ができたと思います。

また、私は四月から建設コンサルタントとして働きます。この体験を糧に土木技術者として働いていこうと思います。

最後に、引率し指導していただいた中央大学理工学部土木工学科の原忠先生、研究室の先輩方、また大変お世話になりました小川晴司様に対し深く御礼申し上げます。



写真 小川様宅を訪問

第 1 回 学生対抗ソイルタワーコンテスト 開催報告

会員サービスグループ 幹事
原 忠 (中央大学)

地盤工学会関東支部では、平成 18 年 12 月 2 日(土)に日本大学理工学部(船橋校舎)にて第 1 回学生対抗ソイルタワーコンテストを実施した。本コンテストは、土質力学の専門知識を存分に生かし、与えられた 4 種類の試料を自由に配合しソイルタワーを作成する学生参加型の行事で、耐荷重(強さ)、重量(軽さ)、高さ、美しさ(芸術性)、プレゼンテーションなどを審査し、総合順位を決定するもので、初年度は 5 大学 8 グループが参加し、熱戦が繰り広げられた(写真-1)。ソイルタワーの作成には、本大会の審査委員長を務められた太田秀樹教授(東京工業大学)も飛び入りで参加された(写真-2)。



写真-1 ソイルタワーコンテスト開催風景



写真-2 太田秀樹審査委員長も飛び入り

参加グループには、予めソイルタワーの作成方法や採点基準を記した大会規定を配布したが、タワー作成に用いる用具類はあえて制限を設けなかったため、通常の締固めに用いる鋼製モールドや角材や塩ビ管などを組み

合わせた本格的な型枠、さらには円柱棒、空缶を細工した締固め用具など、各グループ独自の道具が持ち込まれた(写真-3)。また、いずれの参加者も複数回のトレーニングを重ねており、参加校の威信をかけてコンテストに臨んでいた。

ソイルタワーには、粒径の大きい礫材を心材に用いたものや、粘性土を補強土のように層状に挟み込んだものなど、評価点を加点すべく様々な工夫が加えられていたが、細粒分の含有による予期せぬ亀裂や、予想を遙かに上回る高含水な材料の取り扱いに苦労する参加者も見られた。これら困難な条件下ではあったが、完成後 60kg を上回る耐載荷性を有するソイルタワーもあり、荷重を追加する毎に参加者からは歓声があがった(写真-4)。なお、各グループともタワーのコンセプトが比較的明確で、終了までのわずかな時間を利用してタワー側面を化粧したグループも見られた。

写真-3 参加者手作りの型枠と締りめ用具



ったが、参加者のほとんどが授業で得た基礎知識を生かしながら実際の土に触れる機会を得たことに満足した様子で、若手技術者の交流の場の一つとして継続した開催を希望するグループも複数あった。今後もこのような若手技術者・学生を主体とした学会行事が、多数の参加校のもと定期的に行われることを期待している。

なお、本コンテストの運営には、日本大学理工学部社会交通工学科地盤工学研究室および武蔵工業大学都市基盤工学科地盤環境工学研究室各位の協力を寄るところが大きい。また、基礎地盤コンサルタンツ(株)、佐藤工業(株)、前田建設工業(株)には開催に際して多大な協力を得た。末筆ではありますが、ここに記して謝意を表します。

コンテスト終了後は直ちに表彰式が行われ、上位3グループと審査員特別賞が発表された。初年度入賞グループは表-1に示す4グループである。表彰式後に行われた懇親会では参加者同士の交流も盛んに行われた。

土質力学を主題としたコンテストは地盤工学会では初の試みであり、材料から準備に至るまで手探りの状態であった。このような条件のもと、半ば見切り発車的にスタートした行事ではあ



写真-4 ソイルタワーへの載荷

表-1 入賞グループ

順位	学校名	参加者氏名
1位	横浜国立大学・地盤研究室	小松佑子, 山口鎮雄, 志村勝宣
2位	横浜国立大学・地盤研究室	若尾和俊, 柴山華子, 玉置久也
3位	中央大学・地盤環境研究室	石井嘉一, 榎木亮平, 勝亦徹
審査員特別賞	武蔵工業大学・地盤環境工学研究室	畔上洋一, 小坂橋拓馬, 矢作卓也

第3回関東支部研究発表会 (Geo-Kanto 2006) 優秀講演者

研究発表会グループ リーダー幹事
規矩 大義 (関東学院大学)

平成18年11月9日、10日、関東学院大学・関内メディアセンターにおいて、Geo-Kanto2006(第3回関東支部研究発表会)が以下の通り開催されました。投稿された論文111編の中から、14名の方が優秀講演者表彰を受賞されましたのでご紹介いたします。

表-1 優秀講演者表彰受賞者

受賞者氏名	所属	発表論文名
増田 拓哉	茨城大学大学院	シルト質土の繰返し劣化に及ぼす主応力反転の影響
川原園 美幸	東京理科大学	締りめ度90%以上での砂礫の変形強度特性
高山 英作	(株)不動テトラ	高圧噴射攪拌固化壁による液状化時の過剰間隙水圧伝播防止
手島 昂一郎	武蔵工業大学	遠心場降雨実験による斜面崩壊の再現 その1 降雨再現システムの概要
薄井 隆義	茨城大学大学院	侵食を受ける海岸崖泥岩の乾燥に伴う含水比低下特性
佐藤 あすみ	横浜国立大学	2005年パキスタン地震で出現した地表地震断層の形態に関する現地調査
金丸 太郎	東京理科大学	EPSブロックの圧縮強度に与える拘束圧の影響

竹山 智英	東京工業大学大学院	関口・太田モデルにおける特異点処理法
渡邊 保貴	茨城大学	浄水汚泥のスレーキング特性
増田 直哉	東京理科大学大学院	FWD 試験と平板載荷試験により評価された地盤剛性の関係
錦織 大樹	東京理科大学	地震時における新形式一体 GRS 橋梁の変位挙動
浦川 文寛	財団法人鉄道総合技術研究所	バラスト軌道劣化モデルの開発を目的とした単粒度砕石の3次元形状計測システム
大藤 恭平	武蔵工業大学大学院	TRD 工法における1パス固化液に関する研究
土田 敦司	茨城大学	旧山古志村における新潟県中越地震時の実効雨量に関する検討

東京都文京区：区民大学「区民のための地震警戒警報 - 発令 グラツときたらあなたはDOする」

(社)地盤工学会関東支部事務局
西川 泰子

文京区民(受講者約20名)を対象にアカデミー文京にて講座を開催いたしました。

第1回	11月10日(金)	「首都圏の地盤の成り立ちと地震動の特徴」	清水恵助(元九州工業大学 教授)
第2回	11月17日(金)	「地震時の危機管理(リスク管理)について」	天國邦博(パシフィックコンサルタンツ(株))
第3回	11月24日(金)	「ガス管などの地下構造物に関する問題」	中根宏行(東京ガス(株))
第4回	12月1日(金)	「地震による地盤災害と対策」	東畑郁生(東京大学 教授)
第5回	12月8日(金)	「斜面と擁壁の安定性評価と対策」	安田進(東京電機大学 教授)

受講者の関心は高く熱心にメモをとりながら聴講する様子がみられました。最終回には以下のような質問が出ました。

1. 危ないマンションはどう判断すれば良いか?
2. 木造家屋における危険性はどうか? また、どこに相談すれば良いか?
3. いろいろ被害があるようだが、結局何が問題なのか?
4. 自分が住んでいるところは大丈夫か? 六義園は池だったとの事だが地盤は良いのか? シビックセンターあたりも悪いのか?
5. 横揺れはなぜ起きるのか?
6. 地震の予知は出来るのか?
7. 世田谷に引っ越ししようと思っているが、地盤は良いか?
8. 文京区でどこに引っ越せば良いか?
9. 東京都の被害想定資料はどこで手にはいるのか?

なお講座を終えてから文京区民のおばあちゃんが「自分の土地は大丈夫でしょうか?」と質問を持って学会にお見えになり安田先生が丁寧にお答えいたしました。おばあちゃんは喜んでお帰りになりました。このおばあちゃんは引越し先を検討しておりご自分でも防災マップなど資料を集め大変勉強熱心な方でした。事務職員の中には火災ハザードマップを見せてもらい学会が立地している地域の危険度を始めて知った者もいました。

IW-TDGM2007「廃タイヤを用いた新しい地盤材料-課題と挑戦」

IW-TDGM2007 実行委員長
ハザリカ ヘマンタ((独)港湾空港技術研究所)

3月23,24日国土技術政策総合研究所研修センターにて(独)港湾空港技術研究所と地盤工学会関東支部主催で標記国際ワークショップを開催いたしました。関東支部行事では初の国際ワークショップとなります。投稿論文数36編当日参加者人数88名(海外8カ国17名国内71名)がありました。Tuncer B. Edil 教授(University of Wisconsin-Madison, USA) 安原一哉教授(茨城大学)による基調講演 Yeo Won Yoon 教授(Inha University, Korea) ほか2名に特別講演を頂くとともに投稿者による

発表では活発な質疑応答が行われました。このたびのワークショップのメインでもあったパネルディスカッションでは産・学・官それぞれの各分野で活躍する研究者をパネリストに迎えることで相互に知識と経験を共有した意見交換の場を実現することができました。詳細な報告は次回号に掲載いたします。

末岡副支部長 退任の挨拶

関東支部 3年間の活動を振り返って

副支部長（兼研究委員会グループ長、支部強化委員会委員）
末岡 徹（大成建設株）



地盤工学会関東支部が2004年（平成16年）5月に設立されて早3年になるうとしています。私はこの間石原研而地盤工学会関東支部長の下で副支部長の大役をおおせつかり関東支部の多くのメンバーと主に研究委員会と関東支部の運営に担ってきました。ここに“嵐の3年間”がようやく終わろうとしていますので反省も含めてその活動の考え方、方針、今後の展望について簡単に述べたいと思います。

支部設立に際し研究活動としては以下の3つの方針を決めて実行して参りました。方針(1) 関東地方（含：山梨県）の自然や地盤状況に係る地盤工学的課題を中心に研究活動を行う。

方針(2) 関東支部として迅速な活動を行い会員や社会に提言、提案や手引きの形でタイムリーに情報提供するとともに各々の研究活動も有機的なつながりのあるものにする。

方針(3) 産官学公の連携を強めるとともに、特に民間活力を引き出せる活動にする。

(1)に関しては「関東地域における地盤情報データベースの構築と公開検討委員会（龍岡文夫委員長）」

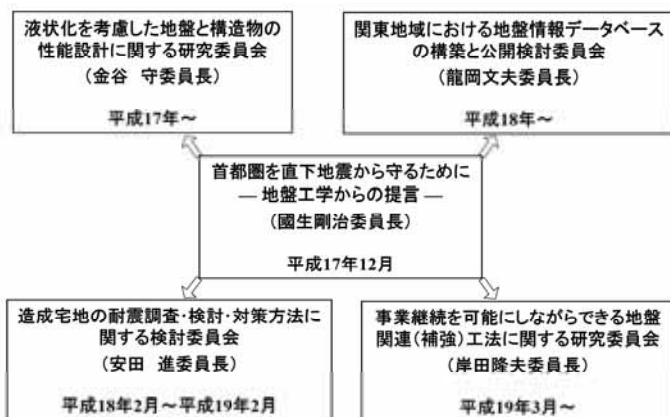


図 - 1 関東支部研究委員会活動の相互関係（一部）

や「首都圏直下地震に対する地盤工学からの提言策定委員会（國生剛治委員長）」の他に「地盤工学的立場から見た三宅島火山災害に関する研究委員会（清水恵助委員長）」を立ち上げ本件に関しては2回の現地調査も含めた結果を多面的にまとめてもらい一部は2006年10月アフターファイブ談話会として紹介しております。

また(2)に関しては図-1に示すとおり國生剛治委員長の下国の防災会議の提言と対応して約1年間という短期間で「首都圏を直下地震から守るために 地盤工学からの提言」としてまとめていただき2005年12月に発表・出版し各地で講習会を開催いたしました。

その内容の主な提言項目は

首都圏での土構造物・基礎構造物の抱える問題

地盤工学の役割と重要性

ゼロメートル地帯、ライフライン、道路、港湾、空港等の被災可能性と対策

造成宅地の被災可能性と対策

性能設計法への研究開発

地盤のデータベースの一元化・公開

共通的な設計法 等

となっています。造成宅地の課題に関しては国土交通省の法律改正とも歩調を合わせて2007年2月に「造成宅地における耐震調査・検討・対策の手引き 地震から既存の住宅を守るために（安田進委員長）」として出版し今後本手引きを利用して多方面に活動を広げていく計画です。また図中の他の委員会も現在活発な活動を行っているところです。

(3)に関しては本部での活動も含めて非常に重要視しており地盤工学会の本部・支部で民間コンサルタント・設計会社・地盤調査会社・地盤専門家・ゼネコンや大学、公的機関が自由かつビジネスの風もある程度入れながら活発な活動をしていただけたらありがたいと思っています。高橋邦夫委員長の「性能設計

へ向けた原位置試験の役割に関する研究委員会(2007年1月~)、岸田隆夫委員長の「事業継続を可能にするための既存構造物周囲の地盤改良(補強)工法に関する研究委員会(2007年3月~)」がこれに相当いたします。

以上述べましたように、関東支部が設立されて3年が立ちましたが地盤工学会全体が今後日本のみならず世界の地盤工学として発展するためには「学・公・民のより強固な連携」と「民間活力をいかに引き出すか」が非常に重要だと思っています。最後に関東支部の活動特に研究委員会グループ及び石原支部長をはじめとした支部運営委員会・支部強化委員会そして事務局等に大変お世話になりました。誌面をかりてお礼申し上げます。

新入会特別会員の紹介

平成18年9月から平成19年4月の間に新たに地盤工学会に入会された特別会員8団体を以下にご紹介いたします(関東支部エリア,入会申し込み中も含む)。今後とも会員の皆様に満足いただける支部運営に努めて参りますので、末永くご支援いただきたくお願いいたします。特別会員に所属の方は、学会行事に会員資格で参加できますので、奮ってご参加ください。

- ・小田急電鉄(株)4級
- ・(株)アースアプレイザル4級
- ・三井住友海上火災保険(株)4級
- ・千葉工業大学畑中研究室4級
- ・(株)シーエスエンジニアズ4級
- ・西武鉄道(株)工務部4級
- ・ジャパンパイル(株)3級
- ・(財)土木研究センター4級

【行事報告】

土構造物の性能設計の動向に関する講演会:11月2日,JGS会館
 第3回関東支部研究発表会(Geo-Kanto2006):11月9日,10日,関東学院大学関内メディアセンター
 東京都文京区:区民大学「区民のための地震警戒警報-発令 グラツときたらあなたはDOする」:
 11月10日~12月8日(5回講座),アカデミー文京
 第37回アフター5談話会「世界の地形と民俗学」:11月17日,JGS会館
 “彩の国”市民科学オープンフォーラム-異常気象と都市洪水水害から地域を守る-:11月21日,さいたま市
 独立行政法人港湾技術研究所の研究施設見学会:11月28日,横須賀市
 第1回学校対抗ソイルタワーコンテスト:12月2日,日本大学理工学部,船橋市
 茨城県研究所めぐり(独立行政法人産業技術総合研究所):12月8日,つくば市
 財団法人電力中央研究所見学会:12月19日,我孫子市
 学校出張講座「豪雨時の土砂災害」:1月28日,お茶の水女子大附属中学校
 技術講演会「地球温暖化と自然災害」:2月14日,埼玉県男女共同参画推進センター
 特別講演会「造成宅地の耐震調査・設計・対策方法」:2月27日,JGS会館
 講演会「地震対策の普及を目的とした地震リスク・マネジメント手法の実用化」:3月20日,東京大学工学系研究科社会基盤学専攻(本郷キャンパス工学部1号館1階15号教室)
 IW-TDGM 2007「廃タイヤを用いた新しい地盤材料-課題と挑戦-」:3月23,24日,国土技術政策総合研究所研修センター,横須賀市

【行事予定】

関東支部総会:4月18日,JGS会館
 総会特別講演会「羽田空港D滑走路建設工事の概要」:4月18日,JGS会館
 第38回アフター5談話会「危ない住宅地盤の真相」:4月20日,JGS会館
 第39回アフター5「斜面工事における斜面崩壊~崩壊事例から学ぶ」5月15日,JGS会館
 特別講演会「そこで液状化が起こった理由(わけ)過去の液状化地点の分析」:8月3日,JGS会館

編集後記

私も3年間の任期を終了しますがこれからも地盤工学会関東支部ニューズレターをよろしく願っています。

(樋口佳意:企画総務グループ幹事)

発行 社団法人 地盤工学会関東支部
 〒112-0011 東京都文京区千石4丁目38番2号 TEL03-3946-8670 FAX03-3946-8678
 E-mail: jgskantou@jiban.or.jp URL: <http://www.jiban.or.jp/kantou/index.html>